

3) 保健所の乳幼児健診にて見出された言語発達遅滞児の フォローアップによるリスクファクターの検討

諸岡 啓一* 有本 潔* 松尾多希子* 柳川 悦子*

発達障害におけるリスクファクターには、発達障害を来す異常症候(発達段階の遅れ等)または原因(周生期障害等)の2つがある。今回は保健所の乳幼児健診にて見出された言語発達遅滞児をフォローアップして、種々の精神・言語の発達段階の遅れ(リスクファクター)が言語発達障害の予後といかなる関係があるかについて検討した。

対 象

大田区内の保健所の1歳6カ月児健診、3歳児健診にて見出された言語発達遅滞児のうち、共同研究者のうち1名が全てに関わっており、十分な経過観察を行ない、予後を確認できた26例(男児20名、女児6名)を対象とした。

方 法

保健所の発達クリニック(3次健診)にて、診察、発達テスト、療育相談を行ない、大田区内の、児童館、親子グループ教室(1保健所)、区民センター、保育園、幼稚園などの療育施設に紹介しながら、経過を観察した。

結 果

フォローアップ開始月齢は 26.2 ± 8.3 カ月、最終観察月齢は 47.5 ± 7.2 カ月、平均観察期間

は21.3カ月であった。最終観察時の診断名は、①言語発達正常8名、②発達性言語障害8名、③精神発達境界例4名、④精神遅滞6名であった。単語・二語文の出現時期、ものまね(模倣)、指示の理解・身体部分の指差しの達成時期の月齢や、多動の有無を、診断名毎に示す。

- 1) 単語の出現時期：発達性言語障害(②)の1例を除き(本児の二語文は31カ月)、正常児の90パーセンタイル(14.5カ月：遠城寺式、DDSTより引用)より遅れていた。出現した症例についてはあまり差がなかった。
- 2) 二語文の出現時期：多くで正常児の90パーセンタイル(28カ月：遠城寺式、DDSTより引用)より遅かった。言語発達が正常化した例(①)では、28カ月以下のものは3名おり、早い傾向があった。他の群では類似の傾向であった。なお、発達性言語障害(②)の1名では38カ月、精神遅滞(④)の3名では37、45、77カ月の時点でも出現していなかった。
- 3) ものまね(模倣)の出現時期は、第3図の通りである。正常児の90パーセンタイル(11.6カ月：遠城寺式、DDSTより引用)より遅いものが多い。各群で差はみられない。
- 4) 指示の理解の出現時期は、殆どの症例で、正常児の90パーセンタイル(16カ月：遠城寺式、DDSTより引用)よりも遅かった。各群

*東邦大学第1小児科

間であまり差がなかった。

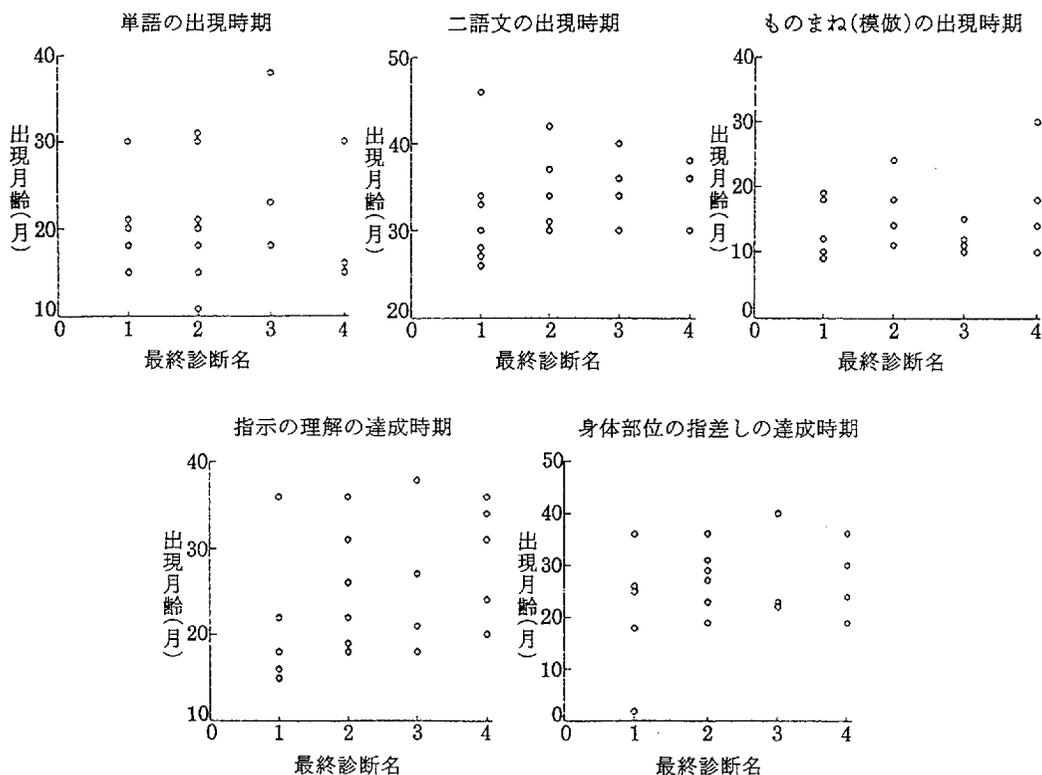
- 5) 身体部位の指差しでは、正常児の90パーセントイル(21カ月：遠城寺式，DDSTより引用)より遅いものが多かった。各群間では明らかな差を認めない。
- 6) 多動：言語発達正常化の2/8，やはり発達性言語障害を示しているものの5/8，精神発達境界例の3/4，精神遅滞の4/6に多動を認めた。

結 語

言語・精神発達に関する達成時期 (milestone)

の遅れ(リスクファクター)は、診断や経過観察中の療育の際に重要である。単語，二語文の出現以外に，模倣，指示の理解，身体部位の指差しの達成時期も正常児の90パーセントイルより多くの児で遅れていた。ゆえに，保健所などでのスクリーニングにおいては重要な指標といえる。

また，最終的な言語・精神発達の予後とは必ずしも関連を有してはいなかった。今回，達成時期について検討したが，さらに，周生期異常等原因についてのリスクファクターも検討をする必要があると考えられる。





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



発達障害におけるリスクファクターには、発達障害を来す異常症候(発達段階の遅れ等)または原因(周生期障害等)の2つがある。今回は保健所の乳幼児健診にて見出された言語発達遅滞児をフォローアップして、種々の精神・言語の発達段階の遅れ(リスクファクター)が言語発達障害の予後といかなる関係があるかについて検討した。